



ハーレム マスター

Harem Meister

小説 竹内けん 挿絵 高浜太郎

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

| | |
|-----|------------|
| 第一章 | 土と焔の女神 |
| 第二章 | 聖光劍の継承者 |
| 第三章 | 『石の華』の武器商人 |
| 第四章 | 名刀作り |
| 第五章 | 薫風斬り |
| 第六章 | 伝説の工房 |

登場人物紹介

Characters



ペンテシレイア

鍛冶屋の里で天才としての名を轟かす女刀工。剣や医術の腕も一流でなんでもできる女性だが、女としての羞恥心が乏しいのが欠点。



ユージェニー

魔道剣の流派の一つ「聖光剣」の使い手。殺された師の仇を討つため、ペンテシレイアに刀を打ってもらいに訪れる。



ジェルクリーナス

ペンテシレイアの元で修行中の鍛冶屋見習いの少年。師のことを敬愛している。

バミリタ

ペンテシレイアが手がけた武器や、その他様々な商品を扱うやり手の女商人。ジェルクリーナスのことを気に入っている。

見るからに柔らかそうで、仰向けになったことで多少左右に流れて型崩れしてしまっているが、そのさまがなんとも言えず魅惑的である。

「さ、触っていいですか？」

「いいわよ」

ここに至ってなお許可を求めてくる少年がかわいいと言いたげにバミリタは頷く。

許可をもらったジェルクリーナスは両手で、恐る恐る双丘を掴んだ。

「あんゝ それは触るじゃなくて、揉むっていうのよ」

「す、すいません」

「いいわよ、謝らなくても、ジェルくんの好きなようにやりなさい」

その言葉に従ってジェルクリーナスは、手中のお肉の感覚を堪能する。

（温かい。それに柔らかい。これがおっぱいなんだ。バミリタ姐さんのおっぱいなんだ）

子供のころから近所にいた綺麗で頭のいいお姉さんの乳房を、自分が好きなように揉み楽しむ日が来ようとは想像したこともなかった。

歓喜に沸騰したジェルクリーナスは、手の中で弄んでいるだけでは我慢できず、胸の谷間に顔を突っ込んだ。

（ああ、いい香りだ）

香水か、線香が焚き込まれているのだろうか。この世のものとは思えぬ馥郁ふくいくとした体臭が鼻腔に満ちる。

「ああ、バミリタ姐さんのおっぱい最高ですっ！」

「うふふ、ありがと」

少年がすっかり自分の身体に溺れていることに、バミリタは満足そうである。

さらに暴走したジェルクリーナスは、左右の乳房に交互にしゃぶりついた。

「ああん♪」

甲高い嬌声を聞きながら、ジェルクリーナスは両の乳首をチュパチュパと夢中になって啜り上げる。

そうこうするうちに小さな乳首がツンと突起してきた。

さらに両腕を上げさせると、腋の下に顔を突っ込む。

「ちよ、ちよつとなに？」

まるで飢えた犬が肉を貪るように腋の下をペロペロと舐め回されたバミリタは恥ずかしそうだが、好きにさせてくれた。

（さすがに師匠と違って、腋毛の手入れも完璧だ）

ツルツルで柔らかな腋を舐め回して満足したジェルクリーナスは、つい腹に顔を近づけた。

細い腹部だ。そして、まんまるいお臍。普段から臍を出して歩いているのだ。腹部には自信があるのだろうか？

（この中に内臓があるのか？）

その当たり前のことが信じられない思いで、お腹を撫で回しながら不思議な感慨に浸る。不意に魔剣に胸部から腹部まで切り裂かれたユージェニーの裸身を思い出してしまい、慌てて頭を振って追い出した。

それから下半身に至る。

白くむっちりとしながらも、ツルツルとした細く長い脚だ。

(ああ、このスカート邪魔だ。めくっていいのかな?)

少年がチラリと窺うと、声なき願望を察したお姉さまは嫣然と笑う。

「ジェルくんの好きにして♪」

「はい」

御主人さまに餌をもらった犬よろしく、喜び勇んだジェルクリナスは、紫の紗でできた巻きスカートをたくし上げていく。

(あ、ショーツだ。バミリタ姐さんの生下着が見えた!)

細い太腿の付け根には、紫色のショーツが隠れていた。

なんか異様に小さい気もするが、透かしが入った高級そうな下着だ。

目を剥き、ゴクリと生唾を飲んだ少年は震える手を伸ばし、ショーツの腰紐に手をかけてから、若干声を上擦らせながらお姉さまに許可を求めた。

「ショーツも脱がしますよ」

「どうぞ、ジェルくんのお好きのように♪」

ジェルクリーナスの余裕のなさが楽しくて仕方がないのだろう。バミリタの声は少し笑いを含んでいる。

腰骨にかかった腰紐を掴んでショーツを下ろそうとすると、お姉さまは腰を浮かして協力してくれた。

ショーツのまたぐり部分と、女の亀裂の間ではヌラーと水飴のような糸が引いた。

(あ、すごい、バミリタ姐さんも濡れている！ もうこんなに……)

自分よりもはるかに知的なお姉さまがしとどに濡れている。その事実を目の当たりにして、ジェルクリーナスの心はさらに高まった。急いでショーツを脚から抜き取り投げ捨てると、バミリタの両膝の裏を持ってM字開脚にしてしまう。

「キャッ♪」

バミリタは羞恥に悲鳴を上げたが、その陰毛の形も綺麗に整えられている。まさに大人の女といった感じだ。隙がない。

「そ、それじゃ、バミリタ姐さん、入れます」

「ダメよ」

「えっ！」

ここにきて拒否されるとは予想だにできなかったジェルクリーナスは耳を疑う。

硬直してしまった少年に、お姉さまは笑いかける。

「もう少し愛撫して欲しいわ。クンニくらいしてちょうだい」

「あ、はい、すいません」

自分の性急さが恥ずかしくなったジェルクリーナスは顔を真っ赤にしながら、お姉さまの前に正座をした。

（うわ、バミリタ姐さんのおま○こはもちろん、肛門までばっちり。こんなに綺麗でお洒落なお姉さんにも肛門ってあるんだなあ）

当たり前のことに関心しながら、ジェルクリーナスは両手を伸ばすと、二つに割れた肉割れの左右に人差し指を置いた。

女性器については、ここ最近、清拭に事寄せて、ユージェニーのものを視姦しまくり、指マンしてきた経験がある。

しかし、あれはあくまでも清拭だ。今回はセックスに至る過程に見せてもらえるのだ。意味合いがまるで違う。

（ああ、バミリタ姐さんのオマ○コってどういう形、色、匂いをしているんだろう。ユージェニーみたいなお転婆と違って、しつとりとした大人の女性だもんな。きつとオマ○コだって知的な雰囲気があるに違いない）

童貞少年はあらぬ夢を見ながら、指先が押さえた亀裂を、ぐいっとばかりに開いた。

「あん♪」

女の最深部を豪快に暴かれたバミリタは、さすがに恥ずかしそうだ。

その表情だけで、ジェルクリーナスはお腹いっぱい気分になるが、性欲はとめどなく

滾ってくる。

（これがバミリタ姐さんのおま〇こ。色んな男を手玉にとっているだろうに、綺麗なピンク色だ。それなのに奥から、透明な滴がとつくんととつくんと溢れてくるなんて、姐さんの身体ってやつぱりエッチすぎる！）

淫らな女の身体から溢れ出る美味しそうな石清水を飲もうと、ジェルクリーナスは顔を近づけた。

香水だけではない、生々しい匂いが湿気とともに鼻腔に入ってきた。その匂いに発情した少年は、匂いの素を探ろうと舌を伸ばし淡い花卉に乗った滴をペロリと舐め上げる。

「あん♪」

下腹部をびくんつと震わせたバミリタは、鼻にかかった甘い嬌声を上げた。

それを聞いて、ジェルクリーナスの理性は暴走する。飢えた犬が餌にがつつくかの如く、お姉さまの媚肉を貪りまくった。

「あん、あん、あ〜ん♪ ああん、そんな、激しい、あん」

鼻にかかった甘い声が、とめどなく頭上から降ってくる。

ふと視線を上げれば、バミリタは真つ赤な顔で涙目に喘いでいた。

（ああ、バミリタ姐さんがあんな顔している。姐さんがぼくにおま〇こ舐められて乱れているんだ！）

自分が女性器を責めることに感じている。その事実にとまらない興奮を覚えたジェルク

リーナスは、バミリタの身体を、陰核だろうと、膣穴だろうと、尿道口だろうと、大陰唇だろうと、小陰唇だろうと、肛門だろうと、一切お構いなしに舐めまくった。

「ああ、すごい♪ 激しすぎる、もう、ダメ、イク、イク、イっちゃう、あたし、ジェルくんにかされちゃう！ イクううううう!!!」

身も世もない嬌声を張り上げたバミリタは、少年の頭を脚で挟みながら、その鼻先に向かって多量の熱い液体を浴びせ、麗しい肢体をビクンビクンと痙攣させた。

さらにジェルクリーナスがお構いなしに舐め続けようとする、息も絶え絶えのパミリタが待ったをかけた。

「も、もういいわ。あたし、もういったから、ジェルくんにかされちゃったから、お願い。少し休ませて……」

「あ、はい、すいません」

ジェルクリーナスが愛液でべとべとになってしまった顔を上げると、バミリタはそれを豊満な胸に抱きしめて余韻に浸る。

いつの間にかギンギンに復活した逸物が、お姉さまの太腿に当たってしまったが、バミリタは素早く股の間に挟んでしまう。

「うふふ、元気ね。あたしの中に入りたいの？」

「うん、バミリタ姐さんとやりたい」

もはや恥も外聞もない。柔らかい女体に抱きついたジェルクリーナスは鼻息荒く頷いた。

「じゃあ、あたしが入れてあげるから、仰向けになりなさい」

肩を抱かれてジェルクリーナスは仰向けになった。すると逸物だけが期待と不安で、隆々とそそり立つ。

どのような攻撃も防げる無敵の盾も、いまなら簡単に突き破れる最強の肉矛に感じる。その上に跨ったバミリタは、いきり立った肉刀を、自らの肉穴に添えた。

「さあ、あたしの溶鉱炉の中にお入り」

少年に挑発的な目を向けた淫女は、ゆつくりと腰を落とす。

「ああ……」

肉棒が女体に呑み込まれる。肉穴が広がるに従って、バミリタの唇も丸く広がっていく。ゆつくり、ゆつくりと腰は落ち。肉棒は呑み込まれていった。

ウネウネとした贅肉が肉棒に絡みついてくる。その強い抵抗の中を、ズル、ズルズルズルと肉棒は押し入っていく。

「バミリタ姐さん！ 気持ちよすぎます。姐さんのおま○こざらざらで、グネグネ動いてますっ！」

そのあまりの気持ちよさに、大の字のジェルクリーナスは悲鳴を上げた。あつという間に再び射精してしまいそうだ。

「我慢しなさい。そんなに簡単に折れるようではキミの作る剣も簡単に折れるわよ」
怖いお姉さまの叱責を受けてジェルクリーナスはなんとか我慢した。耐えられたのは、

事前に一度口で抜かれていたからであろう。

「ヒイ……」

喉の奥を引き攣らせながら、下腹部に気合を入れて、必死に射精だけを我慢する。

その間にも、ビクビクと痙攣する肉棒は、肉道を穿ち進んでいく。

そして、最深部に届いた。

「ああ……キクわ、ジェルくんのおちんちん。子宮口にまでがっちり届いちゃってる」

恍惚とした表情を浮かべたバミリタは天井を仰ぎ、大きく口唇を開いた。

（すげえ、バミリタ姐さんの中にぼくのちんちん、完全に食われた）

その視覚効果抜群の艶姿に、ジェルクリーナスは魅せられる。

「はあ、はあ、んっ……それじゃ、動くけど、できるだけ我慢するのよ」

「はい……」

童貞逸物を咥え込んだバミリタは、慎重に腰を前後に振り始めた。当然、逸物もまた激しく前後する。

「ああ……」

バミリタが腰を前にしたとき、逸物は前に押し倒されズルズルと抜け、後ろにしたとき逸物はズズズと押し込まれ立ち上がる。

「ああ、大きい。ゴツゴツしてる。ジェルくんのおちんちん元気すぎ。あたしの中……掻き出されちゃう」

必死に腰を前後に振るいながら自分のペースで楽しむバミリタの艶姿を見上げて、ジェルクリナスは生唾を飲む。

真つ赤な顔で、いまにも泣き崩れそうな表情である。

とても海千山千の商人たちと凌ぎを削る、新進気鋭の女商人と同一人物には思えない。

（うわ、すげえ、あのバミリタ姐さんがこんな表情するなんて。もつと感じたら、どんな表情になるんだろ）

その好奇心が抑えられなかったジェルクリナスは、両手を伸ばして、目の前で踊る乳牛を思わせる巨大な柔肉を揉んだ。

「あ、こら、何を!!」

「ぼくバミリタ姐さんにもつと感じてもらいたいんだ」

知的なお姉さまの晒す痴態をもつと見たいという願望を抑えかねたジェルクリナスは、硬くしこり立っている乳首を摘んで、左右にキュツと引つ張った。

「ひい」

騎乗位で楽しむバミリタの口元から涎が溢れた。

「バミリタ姐さんつて、乳首弱いですね」

「こら、年下のくせに生意気なことを言うなって、あ、腰まで使うなあ」

慌てたお姉さまに叱責されても、暴走する少年はもはや止まらない。

淫乱お姉さまに主導権を握られ犯されているのも気持ちよかったが、逆に淫乱お姉さま

を翻弄するというのも楽しかった。

両手いっぱい乳房を揉み込みながら、硬い乳首をこねまわし、腰もベッドのスプリングを利用してガンガンと突き上げる。

「あつ、あつ、あつ、あつ……」

若い衝動のままに下からズンズンと突き上げられたバミリタは、理性がぶつ飛んだようである。

自ら腰を動かすことも叶わず、ジェルクリーナスに一方的に突き回された。

「ダメ、やめて激しすぎる。奥に、奥にガンガン当たっちゃうの！」

めった刺しにされたバミリタは、涙を流して許しを乞うが、野獣となった少年は止まらなかった。

ざらざらの壁洞窟の中を、本能の赴くままにガンガンと突き上げて続ける。

(バミリタ姐さんのオマ○コ気持ちいい。すげえ気持ちいい。チンポがすり切れるまで楽しみたいのに……も、もうダメだ、いくつ)

淫乱お姉さまの身体を永遠に楽しみたいと思ったジェルクリーナスだが、肉体のほうが耐えられなかった。

ビクッビクッビクッ！

肉棒の中を熱い溶液が一気に駆け上がった。そして、女の最深部に向かって、噴出する。「あつ、そんな、ビクビクビクビク、ビクビクしすぎ、ひい——ッ！ 熱いの来た！」



「ふうくん、ならばバミリタはどうした？」

「えっ！」

硬直する弟子に、ペンテシレイアは思いつきり皮肉っぽく語りかける。

「バミリタは別に行きずりの女ではあるまい」

「いや、それは……その……バミリタ姐さんには、ひとかたならずお世話になっていたし、あんな色っぽい格好で、傍にいられたら、ついムラムラつとしてしまうのは不可抗力といえますか……」

滝のような汗を流してどもりまくりの苦しい言い訳をする弟子に、師匠は冷たいジト目を向ける。

「ふうくん、わたしも貴様には、結構色っぽい姿を見せてやったと思うんだがな……」

その小さな眩きを聞いたとき、ジェルクリーナは頭の中でジグソーパズルが完成したかのような気分を味わった。

汗に濡れて透ける鍛冶装束、汚れた下着、風呂の手伝い、そして、婦人用剃刀の実用試験。あれらは、もしかして奥手なペンテシレイアなりの誘惑だったのかもしれない。

「いや、その……師匠があんまりにも眩しすぎて、ぼくが根性なしたつたんです。でも、信じてください。ぼくは師匠のことを昔から大好きでしたから、だから、どうしてもエッチしたいんです」

「どうしてもエッチしたいのなら、バミリタの店にいくなり、ユージエニーを追いかける

なり、装飾品の女職人でもとすればいいではないか？」

「いやです。ぼくは師匠としたい。ぼくにとって師匠は特別なんです。あつ、そうだ。また剃毛させてください。ぼくが剃毛したいなんて思うほどに好きな女性は師匠だけですよ」
こうなればだつこだ。自分でもわけのわからない口説き文句を言っている。

しかし、ここで引いたら、師匠との関係は崩壊することはわかっていた。強姦未遂という事で工房からは叩きだされるだろう。そんなことになったら恋人になるなど夢のまた夢だ。

必死のジェルクリーナスは、ない知恵を絞って拝み倒した。

「それじゃ、師匠、ぼくがマイスターとして独立する祝いつてことで、このおっぱいにぼくのおちんちんを挟ませてください」

「……っ」

その思いがけない方向からの提案に、ペンテシレイアはぎよつとした顔をしたが、ややあつて諦めたように溜息をついた。

「仕方ない。それぐらいならしてやるか」

「ありがとうございます」

喜び勇んだジェルクリーナスは、仰向けになった師の腹部に跨った。

そして、逸物を取り出す。

ブルンと臍近くにまで反りかえった逸物を見上げて、さすがのペンテシレイアも目を見

張る。

(たぶん、師匠がおちんちん見たのって、初めてなんだろうな)

妙な高揚感を覚えたジェルクリーナスは、いきり立つ逸物をサラシに包まれた胸の谷間へとズボリと押し込んだ。

「あっ!？」

目を見開き驚愕しているペンテシレイアに、ジェルクリーナスは懇願した。

「師匠、おっぱいの左右から押さえてください」

「こ、どうか？ あ、熱い。お前のおちんちん熱いぞ……!？」

戸惑いながらも素直に自らの乳房を両脇から押さえてくれたペンテシレイアだが、男根の熱にあぶられて身悶えた。

「うう、師匠のおっぱいにぼくのおちんちんが、ああ、師匠のおっぱい最高です！ 感激です！」

歓喜したジェルクリーナスは夢中になって腰を前後させた。

(ああ、ぼくつてば、師匠のワガママおっぱいを犯している)

大きいだけでなく、とにかく弾力が素晴らしい。プリップリツの乳房の狭間で、逸物は大いに暴れまわった。

「あ、こら、そんな勢いよく動かれると、押さえきれん」

律儀に自らの乳房の谷間から逸物が飛び出ないように、ペンテシレイアは押さえてくれ

ている。

おかげで前後に勢いよく動くことができ、逸物の先端が、胸の谷間から幾度も飛び出す。

「お、お前の先端の穴からなんか出ているぞ」

性に未熟なペンテシレイアは、先走りの液を前に驚いた声を上げる。

「問題ありません！ 師匠のおっぱいが気持ちいいから濡れているだけです」

そう叫びながらジェルクリーナスの獣欲はとめどなく暴走する。

（ああ、このままいくと師匠の顔面にかけることになる。ああ、かけた。師匠の顔やおっぱいをぼくの精液でベトベトにして、ぼくの色に染めてしまいたい）

男の身勝手な独占欲に支配されたジェルクリーナスは、その欲望のままにすべてを解放した。

暴れまわる肉棒の振動を受けて、巨大な肉塊がブルンブルンと波打つ。

「あつ、今度は凄い跳ねてるっ！」

「師匠、出しますっ！」

雄叫びと同時に、ペンテシレイアが見つめる逸物の先端の一つ目が大きく開いた。

ドビュッ！

「キヤッ！」

第一撃は、ペンテシレイアの額から右の鼻筋を通って顎にまで糸を引いた。

その後も勢いよく噴出を続ける。

ドビュビュビュビュビュ~~~~~!!!

白く粘着力の強い液体が勢いよく飛び出し、天才女刀匠の華やかな美貌を白く染めていた。

黒い前髪はもちろん、鼻筋、瞼、頬、そして、鎖骨のくぼみへと垂れる。

(ああ、師匠の顔がぼくの精液でグチャグチャに……)

神の如く敬愛する女性の顔を汚す光景に、戦慄とともに甘い喜びを感じる。

慎重に弟子の様子を観察していたペンテシレイアは、射精が終わったということを確認すると、自らの乳房から手を離し、顔面にかかった液体を指で掬った。

「まったく、師匠の顔にこんなにかけて、このエロ弟子が！」

興味深げに眼前で粘着力を確かめたペンテシレイアは、好奇心を抑えきれなかったのだろう。舌を伸ばすとペロリと舐めてしまった。

(師匠がぼくの精液を舐めた!?)

その何気ないしぐさが、少年の股間を直撃した。

性欲の塊と言つていい、思春期の男の子である。射精したばかりだというのに、新たな獲物を求めて激しく自己主張するのだ。

「あ、あの……師匠、やっぱり、そのぼく、師匠のおま○こに入りたい。その……入れて、いいですよね」



「うわ……師匠っ!?!」

「お前はこういうふうにされたかったのだろう。お前の考えていることなどお見通しだ」
驚く弟子に、悪戯っぽく笑った師匠は、ぐいぐいと自らの乳房を擦りつけてきた。

「ああ……」

極上の乳房で顔を洗われたジェルクリーナスは、いろいろと考えていたことが一瞬にして真っ白になった。

（うわ、すげえ、幸せ。師匠ってやつぱり、ぼくのことを一番よくわかってる♪）

なんの悩みもなくなり、顔面いっぱい乳房を堪能する。

そんな師弟のスキンシップに、バミリタが割り込んできた。

「面白いことやっているわね。あたしも協力するわよ」

バミリタもまた自らの巨大な柔乳を持ってジェルクリーナスの顔に押しつけてきた。

「うぶっ……」

ジェルクリーナスの顔の右半分がペンテシレイア。左半分がバミリタの乳房で埋まった。

「あ、拙者も致します」

年上の痴女たちの暴走に、目を剥いたユージェニーもまた慌てて自らの美乳を持って、ジェルクリーナスの顔に押しつけてきた。

「あら、あら、小娘の分際であたしたちに張りあおうというの？」

ユージェニーの乳房は、年齢に比せば十分に巨乳なのだろうが、成熟した女たちと比べ

れば分が悪い。

明らかに負けている、ということはユージェニーといえども否定できないところである。悔しそうに呻いた。しかし、それで引き下がるほどにおとなしい娘でもなかった。

「拙者は、まだ若うございますれば、これからまだ育ちます。年増では垂れ萎むだけでございますが」

「あんたもなかなか言うわね♪」

ユージェニーの毒舌にも、バミリタは余裕の笑みである。

そんなわけで三者は協力して、合計六つの乳房で、ジェルクリーナスの頭を前後左右へと弾き回した。

（あああ、師匠のはちきれんばかりのワガママおっぱいもいいけど、バミリタ姐さんの大きくて柔らかいおっぱいもいい♪ ユージェニーの少し小さいけど形のいいおっぱいも捨てがたい♪）

いずれも甲乙など付けられない美乳に小突き回されているのだ。

「ああ……凄い幸せです」

ジェルクリーナスは恍惚としていたが、女たちのほうも男の肌乳房を擦りつけるのは気持ちいいのだろう。いずれの乳首もピンピンに突起を始め、吐息が甘くなってきた。

「うふふ、それじゃもう一つサービスしてあげる。こんなのはどお？」

バミリタはジェルクリーナスの左太腿を跨ぐと、サシユサシユと腰を前後させた。陰毛

を擦りつけてきているのだ。

いわゆる「たわし洗い」である。

バミリタにならつて、ユージェニーはジェルクリーナスの背中に自らの陰毛を擦りつけてきた。そして、ペンテシレイアはジェルクリーナスの右太腿を跨ぎ、擦りつけてきた。

「ああ……」

それは単に男へのサービスというだけではなく、女たちもたまらなくなってきたという合図であろう。

しかし、右太腿。ペンテシレイアの股間の感触は明らかに他の二人とは異質だ。

その理由をジェルクリーナスは知っていたが、バミリタも見咎めたようだ。

「ねえ、ペンテシレイア……さっきから気になっていたんだけど、あんた下の毛はどうしたの？」

その疑問はユージェニーも感じていたらしい。興味深そうにペンテシレイアの顔を見る。二人の視線を浴びたペンテシレイアは、普段のクールビューティーぶりを必死に装いながら、成人女性なのに赤ん坊のようにツルツルの恥丘を撫でた。

「こ、こいつに剃られた……。こいつはわたしのことをツルツルにするのが好きなんだ」
その声は震えて、穴があつたら入りたいたいと言いたげだが、なぜかその顔には優越感のよ
うなものが浮かんでいる。

「呆れた。真面目な女が墮ちるととめどがきかないってよく聞くけど、ほんとだったんだ。

そのポーカーフェイスに騙されていたけど、実はあんたが一番墮とされていたのね」

「……面目ない」

恥じ入るペンテシレイアの様子がかわいく、元凶であるジェルクリーナスは微笑んでしまった。

同時にこのまま全身を三方から一方的に奉仕されているのも申し訳ない気分になった。

(よし、ぼくもやるぞ)

ジェルクリーナスは両手をそっと伸ばすと、左右の膝に跨るお姉さまの乳房を手に取り、その乳首を吸う。

「あん♪」

「ユージェニー、前に回ってぼくのおちんちんに跨って」

「いいのか？」

年上の二人に遠慮している風情のユージェニーに大きく頷く。

「うん、ユージェニーは久しぶりだからね。ぼく、まずユージェニーの中に入りたいんだ」
「ああ、拙者も早く繋がりがりたかった」

ジェルクリーナスは、右太腿にペンテシレイア、左太腿にバミリタを乗せたまま、股を大きく開いた。

逸物はすでに隆々と隆起している。

「ああ、いつ見ても立派に肉剣だ。これに突き殺されるのが女の本懐というものなのだろう

う」

上擦った声を出したユージェニーは、左右の大人の女たちの跨る太腿の前に足を開けて、いきり立つ逸物を、自らの体内へと呑み込んだ。

「あああ……」

ズブズブズブ……！！

逸物は小さな体軀の中に沈んでいく。

二ヶ月ぶりに男に貫かれたユージェニーは、ジェルクリーナスの首つ玉にしがみついて、のけぞった。

「はあ、気持ちいい……♪」

「ぼくもだよ。ユージェニーのおま○こはほんとキツキツで気持ちいい」

やはりこの締めつけは、若さと筋肉なのだろうか。肉棒がキュンキュン締められる。

「ああ……拙者は必ず勝って、このおちんちんを今一度楽しむのだと、それを励みに仇討ちに邁進まいしんし申した」

男の首を抱いたユージェニーは自ら腰をがくがくと振るう。そのうわ言のように囁かれた一言を、バミリタが聞き咎めた。

「うわ、いまさき気にとんでもないこと言ったわね。男のちんぽが早く欲しくて、仇討ちに邁進したなんて、いま世界中でユージェニー英雄譚に熱中している人たちが聞いたら泣くわよ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです

「小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ



女幹部メル様の
セカイ征服計画!

「小説…高岡智空 / 挿絵…鈴原依縫

全国書店で
好評
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!



既刊LINEUP ● 仙聖字態戦姫 / ブナガツ ①～③
● 純魔 / 帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりに語る悪者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の短剣士がSMに目覚めたようです

● ビルグムメイデン ①～②
● 歌組後らい節 / カースイーター-1
● 魔海少女ルレイ・エル

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはこころみください。お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!